

講演会がありました!



エスポアール出雲クリニック院長

高橋 幸男(たかはしゆきお)先生

講演

「痴呆の人とともに生きる」

まめなかの

発行責任者
隠岐広域連立立
◎ 病院院長
隠岐の島可成立可

地域連携室、老人性痴呆疾患センター)では、高齢者・その家族の方に対して、痴呆に関する正しい知識をもっていただくことを目的に「痴呆の人とともに生きる」と題して講演会を開催しました。(昨年十一月、隠岐の島町ふれあいセンターにて)

講師には出雲市でご活躍の高橋幸男先生をお招きし、ご講演をいただきました。

先生は昭和五十九年から三年間当院精神科医長として隠岐の精神医療のためにご尽力いただきましたが、この隠岐での三年間の経験が現在の自分自身の原点であるとおっしゃっていました。

講演では痴呆の現状や様々な問題点、考え方や対応のヒントを情熱的に話していただきました。日本では痴呆症になつてはいけないうものという風潮があり、ボケはなおらない、どうしようもないものとして家族・地域の人から疎外され見放されがちである現状を、そして痴呆症は単にコミュニケーションをうまく持つことができない状態であり、心は健常者と何ら変わらないことを、実際の患者さんの直筆作文をスライドで紹介しつ

つ分かりやすく説明していただきました。

さらに痴呆は「若い」の一過程でありだれもが通る道であること、痴呆症の人がどういう人たちのかを知り、上手なコミュニケーションの取り方を理解することで、痴呆を患っても笑顔で暮らせる町作りが可能であること、そのために定期的に市民講座を開催しておられることをご紹介します。

今回の講演会にはたくさんの方にご参加いただきました。またアンケートを実施したところ、たくさんの方の貴重なご意見やご指摘をいただきました。ありがとうございました。ここに一部ですが、ご紹介させていただきます。

【今回の講演会の感想】

・高橋先生のお話は本当に身にしみるような内容で、自分の痴呆に対するとらえ方について改めて見直すよい機会になりました。本当にありがとうございました。

次ページへ

・痴呆の方も環境によつて本人も家族も良くなることを今日のお話でよく分かりました。今後、痴呆の方が周りにおられた時は地域でもつと支えなければいけないと思ひました。

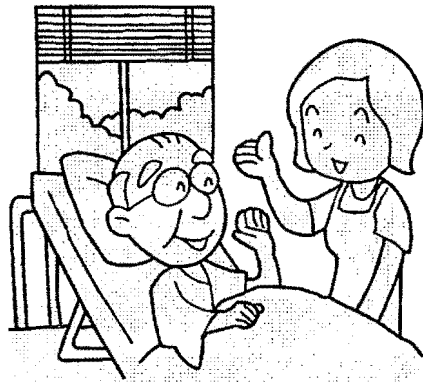
・親の介護が終わり、今度は自分が老いに向かつてゆく、安心して老いて、ボケていい社会になるといいと思ひます。

・「痴呆になつても安心して暮らせる社会づくりは」障害者にも同じことが言えます。子供も老年寄りも障害者も共に暮らせる社会になつたらと思ひます。

・痴呆の家族とどう対応したらよいか悩む毎日でした。本人が非常に不安に思ひつらい思ひであることがよく分かりました。今日の講演で気づいたことを今後の毎日に明るく取り入れていきたいと思ひます。

・「長生きすればボケることもあるわね」：とても心に残りました。これからの人生この気持ち大切に生きていきたいと思ひます。多くの方がこのような認識がもてる雰囲気づくりをしていく必要があることを強く思ひました。

・高橋先生と二十一年ぶりにお会いでき、とても嬉しかったです。



【老人性痴呆疾患センターへの質問・要望】

・ボケたとき家族の者がどうしたらよいか分かりません。本人に言つて良いか悪いかもわからず本人は自分が正しいと思ひ、家族は叱られればなすです。今まで一年中病院に通つてもどこに相談室があるかわからず次の機会にと延ばしてしまいました。

・センターについての認識が島民にまだ十分広まってないと思

います。今日は一つのPRになつてよかつたと思ひます。住民の頼りになるセンターとなるよう、また継続されることを願つています。

・名称は聞いていますが、相談窓口がよくわかりませんので、詳しくわかりやすい手段を考え、もつとPRして欲しいです

・高橋先生の言われた「交流塾」を是非地域で取組んでください。医療はもつと地域へ出ていくことが必要だと思ひます。

・隠岐の島町にも痴呆性老人デイケアができたらいと思ひます。

・隠岐病院では痴呆又は精神科デイケアをされる予定はないですか？

・今「痴呆」という呼称について見直そうとする動きがあり、呆の：と書かれてあります。明日は我が身と思ひ、少し淋しくなりました。

特別視しない風土を構築する上からも、呼称や表示・表現方法についての思いやりが求められている気がします。

呼称変更について

ご意見にもありましたが、現在使用されている「痴呆」という用語の持つマイナスイメージが、早期の診断と治療開始の取り組みに支障となつていたことから、国は「痴呆」から「認知症」への呼称変更することを決定しました。このことで老いることが少しでもプラスイメージで語られるようになればと思つています。

老人性痴呆疾患センター
(隠岐病院正面玄関横
地域連携室内)

当センターでは、痴呆にかかわるさまざまなご相談、必要に応じて診察、検査等の手配を行つております。病気によつては早期発見、早期治療によつて回復可能な症状もありますので、お早めにご相談いただくことをお勧めします。まずはお気軽にお電話ください。

電話相談

毎週月曜日から金曜日

九時～十二時

または十四時～十六時

専用電話 08512-2-6462

ファイブリンノーゲン製剤を使用した可能性のある方へのお知らせ

C型肝炎ウイルス検査のおすすめ

ファイブリンノーゲン製剤は、一九六四年に製造承認され、C型肝炎ウイルスの不活性化処理が十分にされるようになった一九九四年まで、三十年間にわたって外科、産婦人科などで使用されてきました。主として出血を止める止血剤として使われましたが、この血液製剤からC型肝炎ウイルスに感染し、それが原因でC型の慢性肝炎になり、肝硬変、肝癌になる方がいることもわかり、社会問題となってきました。

そして重要なことは、ファイブリンノーゲン製剤を使用してC型肝炎ウイルスに感染しているにもかかわらず、そのことを知らされてない患者様がいることです。

そこで当院では、ファイブリンノーゲン製剤の納入と使用について調査する事と致しました。結果、その使用につきましては

確認出来ませんでした。納入につきましては三菱ウエルファーマ社の協力を得まして、一九八〇年(昭和五十五年)から一九八七年(昭和六十二年)までの間、当院にも納入されてきたことが確認されましたので、C型肝炎ウイルスに感染しているかどうかの検査をお勧めします。左記について、心当たりのある方は総務課庶務係まで申し出て下さい。

記

一、申し出ていただきたい患者様の範囲

外科・産婦人科などの手術や出産時、又は、その他の疾患で大量出血した方

二、申し出先

(隠岐病院・総務課庶務係)
電話番号 08512-2-1356
内線 164

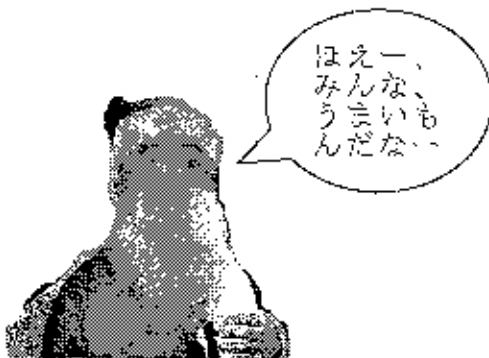
五箇中学生

クリスマス ボランティア

12月22日看護師主催のクリスマス会に、五箇中学生で、民謡サークルあこな会の4人がボランティア参加してくれました。(平井さん、荒田さん、岩佐さん、山下さん)

4人は、看護体験実習でお世話になったので、自分達ができる事でお礼をと、今回、隠岐民謡を患者さんの前で披露しました。若い4人の三味や唄、太鼓や踊りに会場は大盛況！患者さまも大変喜んでいただきました。

目指せ！うたって、隔れる看護師を。



PHSシステムの導入について

—患者さまとのホットライン—

当院では、迅速な医療サービスの提供を行うため、この度、院内専用のPHSシステムを導入しましたが、一般に使用されている携帯電話やPHSとは異なり医療機器等に影響を与えないものであります。

従来から、ご来院の方々には医療用機器の誤作動を防止するため、携帯電話やPHSの院内の使用を制限させていただいておりますが、今後も院内での使用を制限させていただきますので、ご了承願います。



当院で使用するPHSシステムにつきましては、公衆のPHSとの判別を明確にするため、「医療用」と明記した赤いストラップを使用しています。

保険証提示のお願い

保険医療機関では、「健康保険証」の定期的な確認が義務づけられています。毎月の最初の受診日に受付窓口へ提出されますようお願いいたします。また、保険証に変更等がございましたらその旨お申してください。

あとがき

遅くなりましたが、今年最初の発行となります。今年もどうぞよろしく願います。

昨年は、まさに「災」の年でした。記録な台風上陸、新潟県中越地震、インド洋スマトラ沖の津波とその惨状は、目を覆うばかりです。これら被災地の一日も早い復興を願うばかりです。

今年も、とり年。災いがすべからず。福となるよう、飛躍・発展の年にとしたいと思います。

（私ごとですが、新春早々に我が家にはコウノトリが舞い降りてきました。S）